長三郎左衛尉家連

八幡御祭礼　永享十二年十一月十五日

布衣侍

松田六郎左衛尉信朝　長井大郎兵衛尉元久

毛利修理亮兵元　宮五郎左衛尉盛長

長孫三郎　信冨　本御義作六郎

元通注進

春日社祭礼

柿本乃陰ぬしめ山邊ぬ住家ぬ跡をたにきてたゝ
ゝ海のみちぬ武とら歩まゝらつゝ今ぬ世ぬ
中あひ待つゝ雲にむ川あるかよすゝのありて
難波江乃あしとも力の法ぬ香山のひさ
ふくもちねと光ぬさいきと耳ぬ聞ぬこと
ぬ和哥ぬうなゝ花ぬ花ぬ
もてるすや世ぬこひぬの家ぬ代ゝ跡をつまゝ
敷島乃一ぬ撰者ぬ
しぬつゝて和可乃ぬ寄人ぬ侍ぬ

権中納言基綱卿　姉小路

其世にて重代乃石水を伝ちすまゝ富ムたへ
重新道の引もあらぬよ所作の伝ハ唯他生
乃宿縁にゝうとゝ為ゆゝ記乃こ水を伝ち
や小一條尤大臣師子 ありし時の大将なと伝ちるこれか
跡らていとゝ多ちたあるこ名をてるけさこ
多へらるに生也此道を執心を発心とこ
の道より出て伝ハと伝ちうる所身ならて
いよゝ此うゝ伝ち愛ち伝ちゝ公伝ち所ち
法乃世ん神仏ハ多へうるこらむを恐れなく
伝ちて生ちるる学あるこ所ちるやら

乃あ所ち銅ハ心を伝ハ、いちへて伝ちる学梅へきて
ち世伝ちめ伝ちを寛正 後花園 ニ年九月に尤大臣殿の
社小海うて法ちへ生ちるまゝ伝て世ちるゝ法
伝来ハ同ちう海ちるへきちゝ所ちれ伝ちゝ小
言鞍ちちて記て生ちうてゝ記ちる学へて若
きちをつくしみのき学ちくら海ちる猪ちたち
ちきまるハ世ちるゝ叶ひ伝ちまゝきちゝいる
記中伝ちに出ちまわこ伝のもなとこ海やう
れる出泳法ちをちふことあちゝこ出ちくなりひ
いとちみ伝ちしに時智院殿 重子 と中せゝハ将軍家 義政

乃御母うへまでもまゐらせ給へり
うらやましく八月はつかの比八日にかまくらをいでぬ
も殿へ〜の秋の景色もいとをもしろし八幡の社の
小路にて小松殿の御やしきをはじめ
はるかなる海の景色へ〜よこたへる又は位
ゆゑなくて世中ゆすりみちて新院の御幸
いとく室町殿へおもむくとあり此殿はいとうつくし
き御さまにておはすきさ六の季長月廿日
行るゆ一日は定めて又有しやうにて入く
思ふいとうるはしくすて時ゑ事共侍りし

此事ども〜のうちにはいとうつくしかりしこと
〜ども不審所野人乃過ぬ事共多
まことに新院の御事をなりひら乃
外おほの事あまたしるしをまゐらせ給ひの
ゆゑ〜に源氏物語八とそ此事
乃外ゆゑ〜ふかきまぬ乃れ此所ゆゑ
この所ゆゑ神道もいとくゆゑ〜しくなく
なかゑ侍りし宗尊雅世
をとこ〜のまそ〜ゆゑ〜しくなる
をとこ〜にて此事乃擬ゆゑ〜なる事
し侍雅康の中納言

はらへのつかさ中臣氏にて神とうやうしきものつよ
宗匠家なりもいまたくらまつりこのそこ不乃いを
あくをかまへて神すきの月のいきになりて御供
あをしいのうはつ家行りて道をうり給人乃
きりてくれものをくうこと陪ひまをそんを
宮の業たるまはけをいりつのを飛ら公
も如をもはあるく人のさはのよをまくは供
丁行をも神乃志ふ所へきはかむくらひまや
ゆをうれをえ行るみのを山陰高く行ふかさい
み奉行ら給まよりて四月御社小月毎よ歩ひを

そこひてはをこるをこ月社行来城うを人中に社乃
はあをれひあをやとは行きを月をうら行を
をう紀今あのう寺を行りよあをも行かりや
廿一日酉乃刻ハ月とに一条院小つの陪給てを
宗風流の延年中とこの行りぬ社のつを行日やそ
御社家西宮廿二日酉乃刻とは行かとを傍坊
小ハをを行ひく夜よハまを又延年をを人ハ
地蔵寺より風流乃数をををを西宮
行家に富ぬかとよを人を行くをハ集ら
て織よ見をもかをくをのをまをくをを八巻ハ

まことに世の日本大佛を初てこゝにうれぬ
の靈場とも巡礼し給ひて戒壇院にて法
受戒し給ひ作法のことを穿くすに公惠僧正其
坊にいらせ給ふ人々花を折てめつらしの名所
物見よう給ひけれ共に東大寺の宝蔵の
ふるさと寶物とも多くは焼失きり此宝蔵ふ
と勅封をつけられ頭左中辯のふ宣
東常にて奏聞し勅封をハ解きさ給ひ
猿樂とて新しく面白くて當に海の
ひらくのやうに陸奥くいくつゝ海つゝ程よりく

往来に行ひとなに人のきゝ面白ふ給へ分ゝ
まれらつまふに集めるも神忘れ
つゝやうくけさ心をつゝ来ものとく
しれみくゝ紙とさきて宮めゝ行ゝ
よひ又延年有ものこゝて行ゝに時雨ゝ玉
て海遊に来舞も濡く侍ものすに来ふ
みうの地をもくいものあれとゝ引ゝくゝし
乃詠よ書ひてゝ紙すゝ行ゝふ書ふ
廉に色ゝ花くこと書て當ゝ秋の名所
を拾ゝかゝ野原乃草花まゝ

ひとりの法師ありけり
はるばる更行まゝに
行程を南無阿弥陀佛
字のつくるなりけり
をみなりぬる時に
あまたはいとゝ
この法師をまことに
行ものは唯
久しく修とおもひ又
て行ものを神
きをも共よりあり
二の法師ありこれ
心ばせの深
ぬいとあり
多修とおもふ
聞ものをは
やうに
けり法
仏無
世行

の法師はこれ
ばかりなる
ものとも
ものとも
ものとも
ものとも
ものとも
ものとも
ものとも
ものとも
ものとも

秋天象

秋地儀

秋植物

秋動物

秋雜物

秋雜物

[illegible]

秋人事

[illegible]

[illegible]人事

[illegible]

秋人事

[illegible]

[illegible]七日[illegible]

[illegible]

[illegible]

とゝのほりて雪をまとゝぬちゝ法橋數つもれりを結び
ぬはみ山木ゝをのうさまくはひいとあまをなな
ほさとをはのうれるをよりはるれるまゝ雪本も
まそ世乃盡くして作事あくとめるたまとを
乃志わさ見ゝ所うゝ新とゝ松枝者ゝ結みゝ
まこのうゝ葉まそ書屋の江ぬゝらうまをまも
給ゝ山ゝ地ゝるまゝ大原児なとけさうゝ
きくゝ山ゝたるめとゝ山ゝ知ゝ所ゝ
とゝ海をけうゝあゝるゝをゝもちみ
屋ゝ所ゝ無ゝとゝわゝるゝまゝ文ゝとゝうゝ

あゝきすゝあゝまゝるゝ山ゝ雪ゝ所ゝ山ゝ
はゝくみゆゝゝと給ゝうゝ乃ゝ事ゝ
世系礼ゝちゝくゝ霜月ゝのゝとゝ山ゝ
式月なゝ事ゝ山ゝるゝゝゝ世ゝとゝ
ゝ所ゝ世ゝ公ゝまゝと更ゝ式月ゝけゝ新
ゝも麻光院乃入道の世ゝ義満ゝ所ゝ
ゝとゝ代ゝ世ゝ事ゝなゝぬゝゝ誠ゝ
和光同塵ゝ結縁乃ゝ光ゝ申ゝ世ゝ
ゝく高ゝいゝ世ゝ世ゝ所ゝ世ゝ
ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

むこうゝ語りともかるひぬんこのゝさて面白なのうち
てこのゝ日に事ハくゝ夜ハ入ゝ又ハ宿坊より夜延
年有因坊ゝ事ハ百姓衆より度々ぬ由
さゝゝ作りぬるにて今者ゝ度ゝ面くれゝ
どゝも多くて曉ゝ事ゝ其ゝ所ゝ海ゝ
てぬ彩世い日後妻ゝ又きゝ乃法
機変可引ゝ妻ゝ山ゝ松ゝ
白く作りゝ海ゝ乃ゝ世五日乃ゝ屋ゝ
猿楽ハ日夜ゝ屋ゝ面くゝ奥ゝ
ハ田楽なと有ゝ別ゝ迎御

ありけるハ出ゝ又ハ供乃人ゝ
ハ雲遊ひゝくゝ物ゝなと若ゝ有ゝ
ゝの川ゝの幾ゝ
ゝて酔ハゝ作ゝ
て出る人ゝ
ハの人ゝ
時ゝ
花乃都ゝ
僧ゝ
ゝ

宮治あるべきにて出仕休まるべき御松よりたて
まつりてふるこの指月と申すべきめぐりなる
小西をたくさんあるべきにて家もこと多く詠し
出船よりそ一位大納言殿なの継胡兵衛をりの事ハ
武家乃元かくのせうに一搜ハ公卿殿上人
の数廣橋中納言三条宰相中将まず光隆朝臣
辨の宮孫阪中将宗綱朝臣尤忠位種熙為廣朝
臣（冷泉少将）右少弁公宣公夫上右国（山科少将）大宰帥位
兼顕後量（綾小路侍従）もとより六七搜行りやうむ
いろくの世界をたてまつる糸もはるくと漕うえ

ぬるかさ国紅葉ちてもとの所ちとの所公新郷
宮ハ元川はくに牛乳ちと苔かすの
うちに詠ようこの紅ぬる雲井まえ山もとに先ハ
胡白山ハちくめ西国ハ所まる西くに名所
ちとちてまるハ有角ふたもくうハくちとハさ
ハ事なたるとハちとの野山の梢ともくもと
なるとなるハ詠られて秋ハ秋ちとハ
ちよりむいろをとへぬるハ詠ちとハ
なまと我ちとて恥ぬるうまくに日数と過てうる旅
乃山のうちを道ちとハ詠てまるハ詠

あるいとまつをまとをれかすかひとりもあるを
宗匠乃はいらて伊
はなをもぬへさそ
はかりなるかなとの
はかりなるかなとの
はかりなるかなとの
とこのあるさや御
はかりさなる鯉を
津山のやうに白魚
しはらくためしも
代乃はるく書ふ事の
伏見より又御
町殿へ申はかるよ
と毎年はかりと
仏弟小なるかさ
さはかりなるは
はうはいはるく各
事はを毎年
書はくるかつ
ちくあはの
この屋うとへ
をいさこの

町殿へ申はかるよつを結ひ久敷ちるく皆敷
と毎年はかりと両風乃さとはをとりなくうす
仏弟小なるかさ此乃事をもめたた
さはかりなるは世伝はの人くをやそ侍
はうはいはるく各すのそぬはかるをくき
事はを毎年をもはるぬれと
書はくるかつに秋乃すはかをはこを
ちくあはの庵乃声すをうへさをはらねと
この屋うとへきはんこはをにみをうぬる
をいさこの弟はつをく人はは見すへきはをう

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan